ガネフォ60周年に想う

ローマオリンピック出場
東京オリンピック出場
藤本　重信
（日本大学出身・58クラブ）

このたびはガネフォ60周年をお迎えになりまして心よりお慶び申し上げます。

過日、幹事役の村上順三さんより、ガネフォ60周年記念誌に寄稿のお申し越しを頂きました。誠に光栄に存じます。貴重な機会を頂戴しましたので改めて 50周年、55 周年記念誌を当時の記憶も辿りながら、読み返しました。

ガネフォ出場の皆さんの熱情溢れる数々の行動には、深く感銘を受けました。茲（ここ）にその一端を振り返ってみたいと思います。

東京オリンピック出場時の写真

勇気ある決断とチーム結成

1963年2月ガネフォ日本選手団団長の頭山立國氏より水球チームの参加要請を受けてから約半年間での東京水球クラブの結成でした。

ここに至るまでの間、メンバー各位は四囲の事情やプレッシャー等々、

紆余曲折を経て自らの信念を貫き、全員一致で日本水泳連盟からの脱退という「勇気ある決断」を選択されました。しかし乍ら、脱退届は受理されず「除名」の厳しい処分となりました。

「ルール違反と言われれば、潔く受ける覚悟はできている。」

「スポーツマンシップまでは奪われまい」の心境であったかと拝察します。チームは更に一致団結。今風に言えば「ONE TEAM」となったのです。

日本水球チームのガネフォ出場目的は次の通りであったと理解しております。

＊日本―インドネシア両国間の友好、信頼関係の強化に貢献すること。

＊国際試合の舞台で持てる力を出し切って水球を楽しむこと。

フェアプレー日本とスポーツの力

＊開会式：参加国 51ヶ国、2700名の選手団の入場。

11万人超の大観衆が見守る中、大日章旗を先頭に日本選手団の入場です。皆さん方も万感胸にせまる思いが沸き上る行進であったでしょう。

スカルノ大統領の開会宣言と同時に、スタンドを埋め尽くした大観衆には大きな感動と勇気や希望が届けられたものと拝察します。

＊水球決勝戦　日本　0：2　インドネシア　日本惜敗、銀メダル。

インドネシアチームは、決勝前から打倒日本に燃えておりましたので緊迫した雰囲気の中で、厳しい戦いになることは想定内であっただろう。加えて、当日の審判員が、なんと主催国のインドネシア人であった。これでは公平無私な判定を期待することは困難だったでしょう。試合開始

早々からインドネシアのデフェンダーはハードプレスに加えてラフプレー（掴む、引っ張る、蹴る）がフィールド内で多発したようだ。

一方、反則判定も明らかに不公平となり、日本側攻撃が不利な展開となる。ラフプレーに対する、菅久主将の抗議申請も無視同様の却下。ここで日本のフォワード（攻撃陣）が真っ向から反撃対応すれば、恐らく乱闘試合に為りかねない。よくぞ日本チームは冷静さを保って闘い抜いた。

時間は経過して、無情なタイムアップの笛と共に試合終了である。
この瞬間、インドネシアの選手達はアジアの強豪日本を破っての勝利に、大感激の極致に浸っていたことでしょう。スタンドの観衆も、感動と興奮のるつぼと化していたのは勿論の事でしょう。

おめでとう！ インドネシア！

日本は痛恨の惜敗。準優勝で立派な「銀メダル」獲得です。

スタンドで応援された、在留邦人の方々や企業関係の方々からは必ずや皆さんのフェアプレーと力戦奮闘ぶりに賞賛の大声援が送られたと思います。

ガネフォを終えて

日本水球チームの「ガネフォ参加」プロジェクトがスタートしてから、早６０年が経過しました。人に例えれば還暦、ターニングポイントでしょうか。

顧みますと、準備段階から出発までの数ヶ月間、波乱万丈ともいえるような参加への数多の障害や圧力を乗り越えられた皆さん方は「比類なき**水球愛**」と「確固たる**信念**」で繋がった絆で東京水球クラブとして参加を決意。

12名の強力なメンバーで堂々と本大会出場を果たされました。

水球競技での結果は準優勝。目標は金メダル獲得であったでしょう。一方、参加の目的は立派に果たされたものと固く信じております。

本年は我が国とインドネシア共和国との国交樹立65周年の年となります。ご承知の通り、今日の両国の目覚ましい発展とゆるぎない友好関係は永年に亘る両国先人たちのご尽力の賜物でありますが、その礎の一端を皆さん方が築き上げられた事もまさに事実であろうと存じます。ジャカルタの地に大きな足跡を残されました。

この快挙は永遠に語り継がれるべき誇りと致したいと存じます。あの時の皆さんの判断は正しかったのです。茲(ここ)に深甚なる敬意を表します。

忘れてはならない人

＊ 山 本 健さん（慶応義塾大学出身、ローマ五輪水球代表）

＊ 井 形 敦さん（慶応義塾大学出身、慶応大水球部OB）

このお二人こそ、ガネフォ日本水球チームにとって大恩人だと申し上げても過言ではないと存じます。

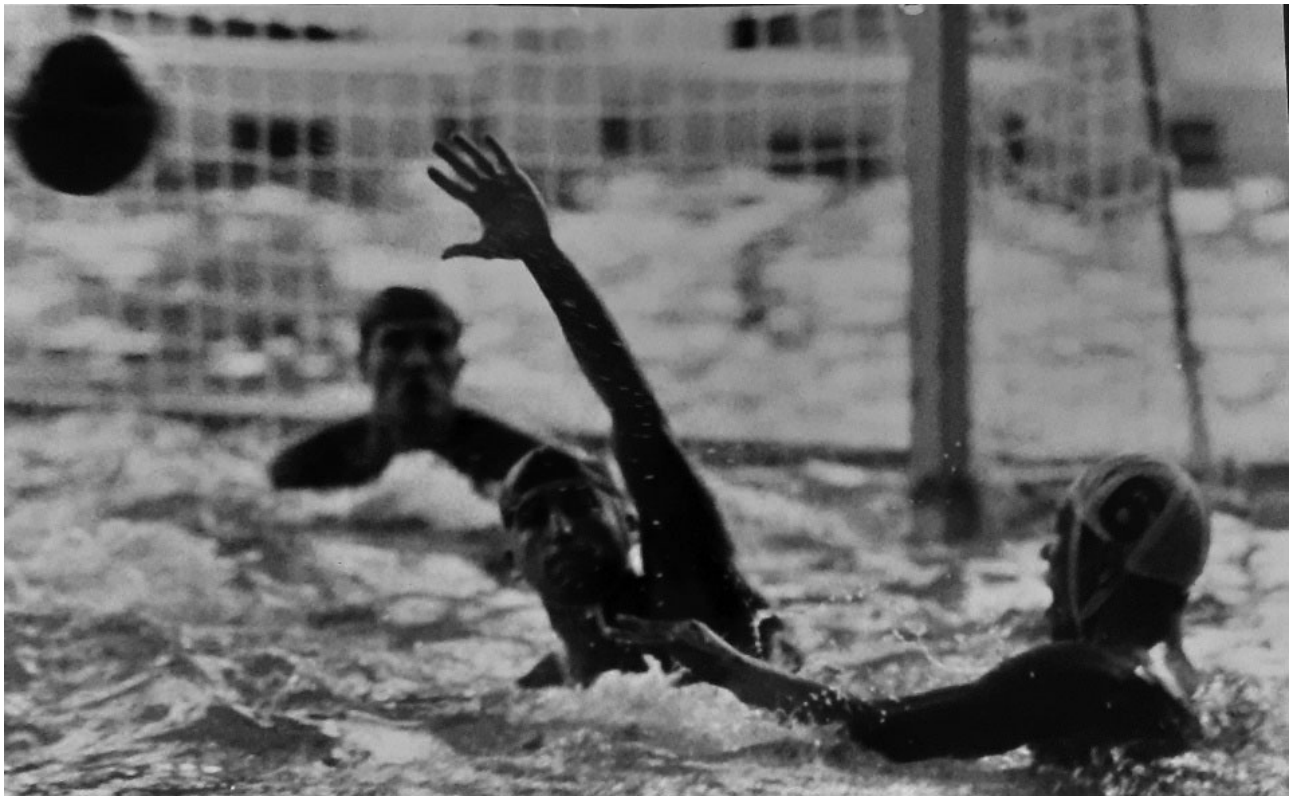
某日、頭山団長より日本水球チームのガネフォ参加の打診を受けた井形さんは山本さんとお二人で、改めて頭山団長の事務所を訪問。

頭山団長より、ガネフォ開催の趣旨や日本側の協力の必要性、等々を縷々(るる)ご説明を受けられた山本さんは、スポーツ分野での日本の参加意義と貢献度に賛同すると共に協力を約されたのです。それからの山本さんのスピーディ且つアグレッシブな対応の数々はご存じの通りです。

「義を見てせざるは勇無きなり」のご心境であったと拝察します。

「ガネフォ参加」プロジェクトの端緒を開かれたばかりではなく、強力な後ろ楯となって、物心両面に亘り、終始支え続けられました。唯々、感

嘆するばかりです。



東京オリンピックの水球予選。

対イタリア戦で私（右端）が先取点を入れる。

（勝負は、5：3で日本が負ける。）